

雪風がお姉ちゃんぶる
話。

遠野静

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昔、艦これにハマっていた頃に書いたものが出てきたので供養のためにあげます。

陽炎型。まいのわ、痴話喧嘩。

死んだりしません。重くはないです。

目次

chapter：野分の相談	—	1
chapter：舞風の相談	—	11
chapter：エンディング	—	20
chapter：後日談／野分・舞風	24	
chapter：後日談／雪風	—	28

chapter : 野分の相談

陽炎「それで？ 舞風に逃げられたから、あたし達の部屋に来たと……」

野分「……お恥ずかしながら」

不知火「お茶を入れてきます……」

野分「あ……お気遣いなく……」

黒潮「ええよええよ。客人だし妹だし、くつろいどき？」

野分「はあ……」

黒潮「とはいえ、こーんな怖いお姉さん二人に囲まれたらそう姿勢も崩せんか」

陽炎「誰のことかしら。ねえ不知火？」

不知火「陽炎と黒潮ではないでしょうか」

黒潮「おう言われとるで姉御。ヤキ入れるべきかね？」

陽炎「どういうキヤラよ……野分もそんなにかしこまらなくていいから。取って食ったりもしないしね？」

野分「はい……」

不知火「お茶です」

野分「あ、ありがとうございます……あ、美味しい」

陽炎「意外だった？ 不知火、お茶は淹れられるのよね」

不知火「陽炎の分はありませんよ……」

黒潮「ま、その辺にしておこうや。今は野分の話を聞こうて」

陽炎「野分の話……って言ってもなあ。じゃあ……とりあえず細かい話を聞かせてくれる？」

野分「はい……これは先ほどのことでした」

くく

野分「でも、あんまり部屋の中で踊ると……ほら、転ぶから……」

舞風「だって明日からあたし旗艦の遠征任務だからねっ！

野分も一緒でしょ？」

野分「……そうね、そうなんだけど、そのことで……」

舞風「えへへ。野分と一緒にかあ。うれしいなっ！

何日くらいになるかな？ おやつは何百円までかな？」

野分「ま、舞風……遠足じゃないんだから……」

舞風「だって、私ずっと演習で錬度上げてたもん。」

ちゃんと出撃するのって、今回が初めてだからっ！」

野分「……そうだった？」

舞風「そうだよっ！ 野分はもう結構出撃してるよね？」

野分「それほどでは。舞風と似たような時期に着任しているから、数回だけだよ。それに姉さんや他の先輩とも一緒だったし」

舞風「違うよ。私は野分と一緒に来てくれるのが嬉しいんだ。

野分なら……きつと、私のことを守ってくれるよね？ 野分は私の王子様だもん！」

野分「舞風……」

舞風「だから、ちゃんと私を守ってね？」

野分「舞風……うん、そうだね」

野分「……うん、そうだ。私、舞風の僚艦から外してもらうように、提督に進言してくる」

舞風「——へ？」

野分「……きつとその方が良いわね。私にも時間が出るし……舞風にとっても、きつと……」

舞風「ちよっ、何言ってるのさ……！ 野分!？」

野分「落ち着いて、舞風。今の艦隊編成だと、舞風は落ち着いていられないでしょ？」

それもあるか……」

舞風「そうじゃないよっ！ 野分は……野分は私と一緒に艦隊になるのイヤなの!？」

野分「？ 今はそういう話をしているわけではなくて……」

舞風「そういう話じゃんっ！ じゃあ、舞風が艦隊にいなかったらどうなの!？」

野分「それなら……少し不安だけど……これまでの先輩たちと一緒になら……」

舞風「……っ！ 野分のバカっ！ もう知らないっ！」

野分「舞風っ!? え、まってください。話を聞いて……舞風っ!？」

くく

陽炎「ああ……そりゃ誤解されるわ……」

野分「……?？」

陽炎「えっと、確認なんだけどさ。野分、舞風が嫌いだから、艦隊から外してもらお

うとか思ったわけ？」

野分「そんなわけはありませんっ！ ……あつ、いえ、その……だから」

陽炎「……なんて元気の良い即答……」

黒潮「あはは……っ。珍しい顔しとるなあ。なら、どうしてかな？」

野分「……元々私は、舞風より遅く着任しています」

陽炎「そうだけど、そんなに長く間があつたわけではないわよ？」

野分「はい……私と舞風の錬度には、殆ど開きがありません。演習で得た錬度差と、実戦に数回出たかどうかというだけ」

野分「けれど、今回の任務は、遠征とはいえ発砲許可も下りている、実戦の伴う任務です」

野分「今の私の実力では、舞風を守りきれるかどうか……だから、私は」

不知火「……………」

陽炎「なるほど。僚艦を外してもらおうとねえ……それを今の会話で説明したのかあ……………」

黒潮「……そら、言葉足りんわな」

野分「……………」

陽炎「あんたさ。これまで仲良かった相手に一緒に頑張ろう！って言ったら、いきなり『グループから外してもらいたいのですが』なんて言われたら……」

陽炎「『え、もしかして嫌われた!』って思うでしょ？ 普通」

野分「……………っ!」

陽炎「この微妙な口下手さ、誰に似たのかしらね？」

不知火「誰でしょうね……お茶、おかわりは要りますか？」

野分「い、いえ、大丈夫、です……けれど私は、なんてことを……」

黒潮「おお、頭抱えとる……ホンマにわかってなかったんやなあ……」

陽炎「大体さ、それで野分の穴は誰が埋めるのよ？」

野分「……姉さんたちの誰かに、変わってもらおうかと」

陽炎「それは別に……任務的にも変更は……出来るかな。」

いいけどさ。それより先に、舞風に説明するべきじゃない？」

野分「……今の事をですか？」

陽炎「……どしたの？」

野分「出来れば、私からは黙っておきたい、というか……姉さんの方から、上手く説明してもらいたいのですが……」

陽炎「……あゝ」

不知火「……」

黒潮「ああ……そういうことなんやね」

野分「やはり、今は話にくいです……それに、話をして舞風が納得するとも思えなくて……」

陽炎「だから、あたしたちの話なら、舞風も了承するだろうって？」

野分「……はい」

不知火「……」

陽炎「どうしたの、不知火？ お茶ならまだ……」

不知火「野分。あなたは——こわがりね」

野分「!？」

陽炎「あーあ……」

黒潮「言うてもうたね……」

野分「どういう、ことでしょうか……」

不知火「言葉通り。だってその任務、僚艦が誰であっても、舞風がいなければ受けていたでしょう？」

野分「………つ」

不知火「あなたは他ならぬ自分の手で、舞風を守りたい。舞風の前では格好付けた貴女でいたい。でも、今はそれが出来る自信がないから、舞風から逃げている」

不知火「単に、こわがりなだけ。その後始末を姉に期待するのはまあ……いいのだけれど」

野分「………」

不知火「あなたは単に、自分が舞風を守る自身がない。そして、怖がっていることを

舞風に知られたくない。だから声の聞こえない場所に逃げようとしている」

不知火「——だから、こわがりだと言ったの」

野分「……………」

不知火「…………お茶が冷めてしまったわね。入れなおしてくるわ」

黒潮「うわ…………言うだけ言うて…………」

陽炎「えつと…………まあでも、だいたい言いたいこと言われちゃったから…………そうねえ」

野分「…………私は臆病者なんでしょうか」

陽炎「…………あんたがってよりも、舞風に対して限定だけどね。結局さ、自分じゃ舞風を守る自身がないってだけでしょ？」

陽炎「でもね…………結局私達って、ほら、艦娘だからさ。沈む時って沈むのよ。そりやもうあつさり。余韻もなにも嘘みたいに」

野分「……………」

陽炎「戦場だし、仕方ないわ。大切な人が目の前で波にのまれていくなんで、よくある話だし…………でもさ、野分」

陽炎「——もし、自分の大切な人が目の前で沈みかけていて…………あなたは、見えないところで待っているだけでいいの？ 手を伸ばせるところにいたくはないの？」

陽炎「…………本当はね、その時に野分がどうしたいか。それだけの話だと思うよ？」

野分「……舞風に、私がどうしたいか」

陽炎「……まあなんていうの。仲良しだった艦娘が何時の間にか沈んでるつても、結構よく聞く話だからね。……悔いの残る選択肢は取らないようにね」

陽炎「あの時、手を伸ばしていたなら——なんて、考えたくないでしょう?」

陽炎「それでも、野分がどうしてもダメだつていうなら……まあ、誰かが変わつてあげるわ。ほら、不知火とかね」

野分「不知火姉さん、ですか?」

不知火「不知火なら構いません。それでもワルツくらいなら踊れます」

陽炎「だつてさ、どうする?」

野分「……いえ、わかりました……舞風に、私の気持ちを伝えてきます」

黒潮「なんか大変な役所、ご苦労さん」

不知火「別に。不知火は思ったことを言っただけですから」

陽炎「ふうん。ところでワルツくらいならつて」

不知火「嘘ですが、なにか?」

黒潮「あ、やっぱりそうなんやね」

陽炎「……にしても、なんかあの説教、不知火にしては熱かつたというか……なんか

実感籠ってる感じがあつたけど……」

不知火「……せい」

陽炎「ぐあっ!? ……なんで、脇腹突くのよ……もう……」

不知火「なんでもありません……ただ、不知火も後悔はしたくないと、思っているだけですよ」

黒潮「まあまあ……さて、一人はこれで腹は決まったとして……」

陽炎「残りね。……いじけて逃げちゃったお姫様は、一体どうしているのかしらね」

chapter : 舞風の相談

雪風「……あの、舞風？　野分と喧嘩をしたというのは聞きました。聞きましたけど……なぜ雪風のところに来ました？」

舞風「……………」

雪風「……せめて、うんとかすんとかくらい、答えてくださいよ……」

雪風（部屋で読書してる隣で体育座りで泣かれてると、すっごい気になっちゃうんですけど……読書に集中できませんので、できれば話だけでも聞かせてほしいなあ……）

雪風「はあ……もう一度聞きますよ？　どうして、この部屋に逃げ込んできたんですか？」

舞風「……だって雪風姉って、皆がいるときは笑ってるけど、よく見ると結構単独行動してるから……」

雪風「はあ……」

雪風（い、意外と見えますね、この子……）

舞風「……他の姉さんたちは、いつも誰かと一緒にいるけど……雪風姉はぼっちだか

ら、この部屋なら落ち着けるかなって……」

雪風「な、なるほどお……」

雪風「……悪意はないんですね？ 無邪気に言ってるだけですよね……」

初風「あ、ちなみに同室だから私もいるわよ」

雪風「……野分が舞風を嫌うなんて考えられないですし……多分、誤解なんでしょうけど。問題は、どうやってこのお姫様を説得するかですね……」

雪風「はあ……あのですかね？ とにかく舞風も、もいつかい、野分と話をして見て……」

舞風「やだ！」

雪風「……きつと舞風が聞き間違えたか、話の途中で逃げたかですよ。野分はそんな子じゃないって、舞風だって知って……」

舞風「今の私の前で野分の名前を出さないで！」

雪風「……あ、はい、すみません」

雪風「めんどい……というかどうすればいいんでしょう？ ……だいたい、こういう役回りをもっと姉属性のある姉妹がすべきじゃないんですか？」

雪風「姉さんたちと違って、拗ねた妹の扱いなんて雪風わかりません……ぶっちゃけ、

超ピンチです)

初風「私もいるけどね。聞いてる？」

雪風(そしてこんな話をしてる間にも、舞風は勝手に落ち込んで……ああつ鼻を噉りだしたっ!!?)

舞風「きつと、野分は私のことなんてどうでもいいんだ……」

雪風「だから、そんなことは……」

舞風「そうだもん……私、野分に捨てられたんだ！」

雪風「語弊を生む言い方はやめましょうっ！　ね！」

舞風「だから私は一人でやっていけるよう、雪風姉のところに来たの！」

雪風「はあ……んえ？」

雪風(ちよつとまってください！　いま論理の飛躍が！　飛躍が見えましたよ!?)

雪風「ええええと、その……それはつまり何がどうしてどうなつてそんな結論になつたんですか？」

初風「やだ、雪風が混乱してる。見てて楽しいわこれ」

舞風「私、一人でも大丈夫だもん……大丈夫な子になるの！　だから雪風姉みたいな幸運艦になるために、雪風姉のところでお世話になる！」

雪風「……、それは」

初風「雪風が『それは多分逆効果……』って言いたいけれど、妹の純真な瞳を前にそんな夢も希望もないセリフ言えないって顔をしてるわ」

雪風「いやバカなんですか？ 雪風の仇名を知ってますか？ とうかバカなんですか？ 地味に雪風の古傷も一緒に抉ってますけど!？」

舞風「うう……ぐすっ」

雪風（泣きたいのはこつちなんですけどお！）

初風「はあ……言つとくけど、雪風の傍にいたからって雪風みたいに幸運艦になれるわけじゃないわよ」

舞風「そうなの？」

初風「そ……むしろ逆効果かもね？ 舞風が雪風の『死神』に運を吸われて、呆気な

く沈んじゃうかも？」

雪風（く……こつちからも古傷をえぐりましたが、ナイスです初風……！ これならいくら舞風でも……）

舞風「……それならそれでいいかも」

雪風・初風「!？」

舞風「いいんだ。野分は私のことなんてもうどうでもいいんだ……だったら、私このまま沈んでやる……雪風姉さんに——『死神』に、運を吸われて沈むんだ……」

初風「あんたねっ……!」

雪風「初風、悪気はないんですから」

初風「だからって、言っつていいことと悪いことが……!」

雪風「なにを怒ってるんです? 短絡的に『死んでやる——』なんて、子どもの喧嘩にはよくあるセリフですよ」

初風「あたしが言っつてんのはそういうことじゃなくて……というか、あんたは……」

雪風「……わかりました。じゃあ一つ、舞風の悩みについて占いをしてあげましょう」

舞風「? 雪風姉、占い出来るの?」

雪風「できますよー。それはもう、百発百中の占いですよ。……これで、舞風と野分の今後を、占ってあげます」

雪風「ここにコインがあります。コイントスをして、もしもこれが表だったら、舞風の想いは勘違い。野分は舞風と離れたくないって思ってます」

雪風「けれど……このコインが裏だったら、もう舞風は野分と仲直りは出来ません」

雪風「いいえ。きっとその前に『死神』が、舞風の命を奪ってしまうでしょう」

舞風「え……?」

雪風「野分にもう二度と会えることはない。貴女の王子様にはもう会えない……いいえ、それよりも先に雪風が貴女を殺します」

雪風「ちなみに私は裏に賭けます。本気ですよ？」

舞風「え、賭け!? ちよ、待って……っ!」

雪風「この『雪風が裏に賭けた』という意味が、伝わったみたいでなによりです」

舞風「ま、待ってよっ!? 嘘だよね!」

雪風「待ちませんし、嘘じゃありません。私は『死神』——いえ、今は『魔女』がいいますかね?」

雪風「お姫様を騙す悪い魔女です。見事騙された姫の命は、今や私の手の中に。

……いかげん付き合うのも面倒なので、さくつと決めてしまいましょっか」

雪風「さて、幸運の女神のキスは、雪風に微笑みますかねつと……」

舞風「やだ——やだやだやだっ! 野分に会えないなんてや、待っ——」

舞風「……?」

雪風「……あらら、残念。幸運の女神は雪風に微笑まなかつたようです」

舞風「おも……て……?」

雪風『死神』とか『魔女』だとか言ってたから拗ねちゃったんでしうか。まあ、きつと王子様の想いの方が……雪風の幸運よりも強かつたんでしうかね」

舞風「……………」

雪風「なーんて……………」

雪風（……………くさすぎましたか？）

雪風「……………こほん。舞風は、沈みませんよ」

雪風「これは私の運がどうか、賭けの結果がどうか、関係はありません」

雪風「きつと貴女の王子様が、貴方を護ってくれますから」

雪風「それは私の幸運なんかよりよほど大切な……………もつと尊いものですから」

雪風「……………だから、もう一度、話をしてきたらどうですか？ 二人ならまだ間に合います」

舞風「……………ううっ」

雪風「……………怖かったです。離れたくないんでしょう？」

雪風「なら、こんなところにいる暇はないですよね」

舞風「……………っ」

雪風「……………あんまり長居すると、今度こそ雪風の『死神』が、舞風の命を奪っちゃいますよ」

初風「やればできるじゃない」

雪風「……もういやです。疲れました……こんな役回り二度とごめんです……」

初風「あら、でも似合ってたわよ。悪くい魔女さん？ ああいう演技も出来るのね？」

雪風「即興ですメチャクチャです。大体……二人の関係だとか、沈まないだとか……

雪風が何を言うやら」

初風「でも、舞風は走り出したわよ？ それは雪風のおかげなんだから、胸を張りな

さい」

雪風「……………」

初風「まあちよつと帰り際、あんたにビビってたけど」

雪風「うっさいです……」

初風「でも、あんたにしては珍しいわね。コイントスで結果を外すだなんて」

雪風「んえ……ああ、そのことですか？ このコイン、見てください」

初風「……なにこれ。両面とも表じゃない」

雪風「浦風から貰ったんです。ちよつと前はそれで鳴らしてたとか」

初風「なにやってんのあの子……」

雪風「雪風の女神さまは融通が利きませんからねえ。このくらいのイカサマはしない

と」

初風「にしても……ねえ。ちよつと陳腐すぎない？」

雪風「奇跡のタネなんて、そんなもんですよ……そうじゃないといけないって雪風は
思います」

初風「ふうん……」

雪風「……あ、初風。コインを貸してくれますか？ 普通のコインです」

初風「いいけど、何するの」

雪風「まあちよつと……イカサマとはいえ不穏な事に賭けちやつたので、上書きと
……女神様のご機嫌取りをしようかと」

雪風「もしも表が出れば、舞風は野分と仲直りできる……もちろん雪風は、表に賭け
ますよつと……」

chapter : エンディング

—中庭—

舞風「野分……はあ……はあ……っ！」

野分「舞風？ こんなところに……」

舞風「野分——ごめんっ！」

野分「舞風……っ!？」

舞風「その……私ちゃんと、野分の言葉も、気持ちも、聞いてなかった……」

舞風「だから……ちゃんと聞かせてほしい。野分の考えていること……」

舞風「野分は……私と一緒に出撃するのはいやなの？」

野分「それは違うっ……!」

舞風「……」

野分「違うんです……舞風。私は貴女が嫌いなんじゃない……そうじゃなくて……」

野分「私には貴女に負い目がある……助けられなかった。この手を伸ばせなかった

……その気持ち私にはある……でも」

野分「でも……舞風は私に守ってほしいと言ってくれた。私は頼られている……それ

は嬉しい……私は昔、貴女を置き去りにしたのに……」

舞風「野分……それは」

野分「私は今度こそ期待に応える。そう思っていないと私は、あなたにどんな顔を向ければいいのか、わからない……」

野分「……けれど、不安だった。今の私の実力であなたを守れるか。今度こそ、守り切れるか……不安で……」

野分「……ごめんね。こんなに格好悪い私で」

舞風「……ううん、私こそ、ごめんね……野分の気持ち、考えてなくて……」

野分「舞風が謝らないで……それに」

野分「……それに間違いだった。私は結局。怖がっていただけだもの……だから、舞風！」

舞風「ふええ……っ？ ひうっ!! の、野分？ 急に、私の肩を掴んで……どうしたの？」

野分「私の実力は、確かに……、今はまだ足りないかもしれない……でも、舞風！」

私は、貴女を守りたい！」

舞風「ちよ、の、野分い……かお、顔が近い……っ！ 野分ってば……！」

野分「貴女を守る立場は、何時までも私でありたい。私は……私だけが、貴女の王子

様でありたいっ!」

舞風「の、のわ、き……」

野分「ええと、だから……つまり、私が言いたいの……そうっ!」

野分「舞風のことは私が……今度こそ、一生守ります!」

舞風「」

野分「舞風? 舞風っ!」

野分「どうしたの!? 舞風、あ……っ! 舞風っ!」

— 鎮守府の隅 —

陽炎「あ、終わった終わったあ……。終わってみると、完全な痴話喧嘩だったわね、これ」

不知火「下世話ですよ。陽炎」

黒潮「そういう不知火姉も見てるけど……というか、全員隠れてみとるなコレ……」

陽炎「……ま、色々と改めて見えることもあったんじゃない? あの辺で見ている子

たちにも、さ」

——

初風「あんたの助言、役に立ったじゃない」

雪風「……………」

初風「たまにはいいもんでしょ。『誰かの為に』、その幸運の女神を使うのも」

雪風「……………そうですね、たまには」

雪風（願わくば——）

雪風（願わくば、今だけは——私が二人を祝福することを、許してください）

END.

chapter : 後日談／野分・舞風

chapter : 後日談―野分―

舞風「実はあの時、雪風姉とこんな話をして〜」

野分「え……………」

野分「舞風が本当にすいませんすいませんすいませんっ!」

雪風「いえ…………野分がそんなに頭を下げることはないですよ?」

野分「でも、悪気はなかったとはいえ、酷いことばかり言っただけ…………」

野分「あ!あとで舞風にも謝らせます…………! 本当にすみません…………!」

雪風「別にそれはいいので…………えつと…………ううん…………」

野分「あの…………雪風姉さん?」

雪風「だからもういいですって…………」

雪風「はあ…………そうですね。ま、本音のところをいうと」

雪風「ちよつとだけ、困っちゃいました。あの子の言動はまあともかく…………ああやつ

て無邪気に、考えなしに駆け回っちゃうのは、心配ですね？」

野分「そうですね……はい。舞風はそっかしくて……」

雪風「今回は鎮守府内のことなので、別にいいですけど……もし目を離れた隙に、勝手に敵陣にでも突入されたら、助けられないかもしれないかもしれませんね」

野分「……………」

雪風「だから……これからは絶対に、目を逸らさないように。あれだけ言っただけですから」

野分「あ……………」

雪風「でないと……今度こそ雪風が、彼女の命を奪ってしまうかもしれませんからね？」

野分「……はい。ありがとうございます。……ふふっ」

雪風「な、なんですか急に笑って……」

野分「いえ……なんとなく。童顔の雪風姉さんが、大人ぶってるのを見ると……。あ、あのっ！ 悪い意味ではないんですがっ！」

雪風「……まあ、外見の自覚はあるので別にいいですけど。でも……野分、頭を下に」

野分「……はい？」

雪風「ちよっぶ」

雪風「……忘れないでくださいね。雪風は、貴女達のお姉ちゃんですから」
野分「……………はいっ」

chapter : 後日談―舞風―

陽炎「舞風っ！ お菓子食べないっ!？」

舞風「いただきますっ！」

不知火「お茶のおかわりはどうですか？」

舞風「ありがとうございますっ！」

黒潮「まだあるでー。たんとお食べやー」

舞風「わーい！」

陽炎「やーんもー！ 舞風可愛い！ 末っ子気質可愛いっ！」

野分「その……舞風の、邪気の無さ、というか……奔放さについてなんですけど」

雪風「……………」

野分「長女の方々の舞風への扱いも、結構問題だと思っうんですよね…………？」

雪風「親戚のおばちゃんみたいになってます……」
E N D.

chapter : 後日談／雪風

舞風「はっ!? 雪風姉が波止場で一人で読書してるっ!？」

雪風「……なんでそんなに説明口調なんです?」

舞風「ていうか雪風姉って本なんて読むんだね……」

舞風「わっ、眼鏡してるっ! なんで?」

雪風「ちよつと遠視気味で……。ていうか本くらい読みますよ。舞風が来たときも、読んでたじゃないですか」

舞風「ちよつと見せてー!」

雪風「ううん……まあ、ご勝手に……」

雪風（あれから、どうにも舞風に懐かれてしまった感じがしますが……ううん）

雪風（困りました……舞風相手だと、雪風、調子が狂います）

雪風（あんまり懐かれても……近づかれると、危ないです。この前は冗談だったけれど……今度は、本当に雪風のせいで……）

舞風「うわー。視界がぼやけるー」

雪風「借りたいのって、眼鏡だったんですか……いや、人がかけてるものを勝手にと

らないでくださいっ!」

舞風「あれ? 雪風姉、本閉じちゃうの?」

雪風「あなたが眼鏡を返してくれたら、私も読書を再開できるんですけどね……」

舞風「そっかあ……じゃ、返さない!」

雪風「あはは。海面の女神にキスさせてあげましょうかこの子は」

雪風「……」。まあ、今はいつか」

雪風「それでら、どうしてここに? 雪風に用でもあつたんですか?」

舞風「ううん、ないよ?」

雪風「ないんですか……」

舞風「ただ雪風姉が一人でいたから、話しかけただけ! ねえねえ、なんで気づいたら一人でいるの? なんかたまにふらっと離れてるし!」

雪風「そりゃあ……」

雪風「……どう説明するべきでしょうか」

雪風「……雪風には、実は幸運の女神と一緒に悪い魔女も憑いてるんです。それが皆に被害を与えないように力を抑えてるんですよ」

舞風「雪風姉」

雪風「はい」

舞風「中二っぽい」

雪風「ですよええ」

舞風「でもでも、最近の雪風姉は、ちよつと皆と距離近い気がする!」

雪風「それは、貴女が勝手に近寄ってくるからですよ」

舞風「なんでなの?」

雪風「そしてそれをあなたに聞かれても、ですね……」

雪風「……考え方が変わったとは思いませんけど。ただ、なんというか……死神とか、それ以前にちよつと目が離せない妹がいるみたいで」

雪風「だから、ついつい、手を出しちゃうんですよええ」

舞風「大変だね……?」

雪風「ほんとうにね……」

雪風「……実際、どうなのかなと思うのです」

雪風「雪風は幸運艦ですが……幸福であつたかと問われると、即答はしにくいですが
ら」

舞風「……雪風姉は、楽しくないの?」

雪風「楽しい、と思うんです。思っちゃうんですよ。……でも、それは何時か消え

てしまう楽しきで、それを雪風は知っていたから」

雪風「雪風に関わると不幸な目にあう……なんて噂のお蔭で、勝手に周りが近寄りにくくなってるのは、助かりますけどね」

舞風「ふーん……」

雪風「わかります？」

舞風「……んー、わかんない。私は皆と会えて嬉しい。野分とも再会できた。野分は私を守ってくれる……だから、私は嬉しい」

舞風「きつと、他のみんなもそのくらいの気持ちなんじゃないかなー？ 戦う理由とかもあるんだろうけど……私は皆と再会して、今も一緒にいられることが、一番うれしいよ」

雪風「なるほど。……そういう考えも、ありなんですネ」

舞風「雪風姉もそう思ったりする？」

雪風「そうかもしれないね」

雪風（ニツコリ笑って、いつもの嘘を吐きました）

舞風「どうしたの？」

雪風「なんでもないです……秋とはいえ、海は寒いですねえ……鎮守府の中に戻りましょうか？」

舞風「ううん。舞風は野分を待ってる。今、不知火姉と演習中なんだ！」

雪風「そうですか。……それじゃあ、ついでにあつたかいコーヒーでも買って待っていてあげるとよいですよ。海の上は冷えますから」

舞風「そっかつ！ ありがとう、雪風姉のおかげで助かったよっ！」

雪風「はい……ありがとうございます」

舞風「？ お礼言ってるのは私なのに、なんで雪風姉もお礼なの？」

雪風「さあ、どうしてでしょう？ ……雪風は戻りますから、風邪引かないように」

舞風「はい。また明日っ！」

雪風「また明日」

雪風（でもね……？ 今は少しだけ、考えることもあるんです）

雪風（雪風は『死神』で、近づく人の命を吸って……きつと雪風は誰も幸せにできない。きつとまた一人で生き残る）

雪風（……かもしれないけれど）

雪風「そんな雪風が、今幸せな人達に何かをするのは、おかしいですかね？」

雪風（幸運の女神は答ええないけれど。雪風の考え方は、少しだけ変わったのかもしれない）

ない)

雪風「……こんな『死神』でも、誰かの幸せに役立てるなら……何かを成せる気がするから」

雪風「……ちよつと毒され過ぎましたかね。ま、そんな思いも生まれましたよつてくらしいの軽い気持ちです」

雪風「今は……雪風は何時もの雪風です。『幸運艦』の、あるいは『死神』の」

雪風「これは雪風を構成する要素であつて、取り外すことはできないもの」

雪風「それでも……」

雪風「……出来るなら、皆に等しく『幸運艦』と呼ばれる存在で、ありたいものです」

雪風「……なんてね？」

雪風「……あ、結局眼鏡返してもらつてな……あ、舞風が港からつ。ああ……もうつ……！」

雪風「とりあえず今は……不器用ながら彼女達のお姉ちゃんを、頑張つてみましょう」

か
E
N
D.